

病気や障害のある子どもたちに「どこでも万博」 神戸の企業などがオンラインで体験企画

2025/8/5 16:39

経済 万博



アバターロボットを使い、大阪・関西万博のイタリア館の彫刻を紹介するスタッフら＝大阪市此花区の夢洲



病気や障害で遠出ができない子どもたちにオンラインで大阪・関西万博を体験してもらう企画「どこでも万博」が開かれている。アバター（分身）ロボットがパビリオンなどを探検し、画面と音声を通じて展示物を見学したり、現地スタッフと交流したりする。これまで国内外の子どもを対象に40回以上催し、参加者は数千人に上るといふ。（広岡磨璃）

「チャオ!」。7月中旬、神戸ポートアイランドの兵庫県立こども病院で、子どもたちが明るい声を上げ、画面の向こうのイタリア館スタッフにあいさつした。入院中の子どもとその家族11組が講堂で「どこでも万博」に参加。病棟内のプレイルームでも7組が画面に見入った。

会場側では、米企業製のアバターロボット「temi（テミ）」が子どもたちの「目」となり、イタリア館を巡った。「みんなはテミちゃんに乗り込んでます」。

案内役の日本人女性がそう呼びかけ、同館スタッフとともに2世紀の大理石彫刻「ファルネーゼのアトラス」などを紹介した。「アトラスが支えているのは何でしょう? ①地球②たこ焼き③宇宙」などとクイズも織り交ぜ、子どもたちと会話した（正解は③）。

病院側では、子どもたちがテミの遠隔操縦も体験。展示に近づいたり、視界を上下左右に動かしたりして楽しんだ。参加した加古川市の小学2年富田真桜さん（8）は「心臓が動くところ（30個の陶器の心臓が鼓動するインスタレーション）が面白かった。イタリアのことはあまり知らなかったけど、クイズも全部当てたよ」。母まどかさん（37）は「娘は『あと何回寝たら』と、心待ちにしていた。楽しそうに集中していた」と話した。病院側の担当者も「子どもらしく伸び伸びとしたひとときを、負担なく実現できた」と目を細めた。

「どこでも万博」を企画したのは、IT企業のiPresence（アイプレゼンス、神戸市東灘区）など関西に拠点を置く5社でつくるコンソーシアムだ。小児脳神経内科医の岡崎伸・大阪市立総合医療センター部長が発起人となり、5社が実現に協力した。

アイプレゼンスはこれまでもロボットを使い、長期療養中や不登校の子どもが学校の授業に参加したり、友達と交流したりする取り組みを続けている。クリス・クリストファーズ社長（44）は「単に万博会場と遠隔地をつなぐだけでなく、参加型で主体的な体験を提供できることに価値を感じている。楽しんでいる子どもたちの姿が見られて、素直にうれしい」と話した。

「どこでも万博」は8月中旬までで、既に受け付けを終えている。